



徳島市民病院85年の歩み（2）



徳島市民病院事業管理者
露口 勝

4. 県立医学専門学校から国立医学専門学校へ

徳島市長は医専を徳島に誘致する前提として、市民病院を医専の附属病院に寄付するという案件を市議会に図ることになった。小山市民病院長の著書によれば、昭和17年の夏のある夜、突然市長から電話がかかってきて、今夜8時から市民病院の講堂で臨時市議会を開くから、私にも是非出席するようにということであった。そして議案の内容を聞いてびっくりした。それは徳島市に官立医学専門学校を誘致する前提として、第一に市民病院を県に無償で寄付し、第二にそれを母体として官立医専を設置するという案であった。市長からの議案の説明で市会議員諸氏も初めて知ったほどであった。しかし、結局は官立医専の附属病院にするという条件つきで市議会は満場一致で原案を可決したのである。

それ以来、医専問題が新聞紙上を賑わすようになり、中央でも軍部と文部省との折衝の結果、官立医専を4校新設する予定であると報道された。そして「有力な市民病院を持っている徳島市と松本市および完備に近い県立病院を持っている鹿児島県と青森県との4カ所が最も有力である」と新聞はしばしば報道し、世間もこれを信じていたのである。ところがその年の秋になって政府は、官立医専の設置について、全国で唯1校群馬県の前橋に設立すると閣議で決定したのである。この決

定を知って徳島市および市議会は非常に憤慨したが、これには後日談があって、戦前の中島飛行機が地元の群馬県に医専を誘致するため多額の寄付を申し出て急転直下前橋に決まったとのことである。徳島と同じように官立医専の候補であった鹿児島県では、早めに官立を断念して県立医専の設立に変更したことが伝わってきた。

徳島県が県立で医専を設置するということでは県議会の承認を得なければならないことであり、多額の費用を要する事業で県としても容易なことでなかった。一方、徳島市は医専の設立を前提として市民病院を無償寄付する議決を市議会で行ったこともあって、県立医専の推進を強く望み、県に要請した。それらの努力が効を奏し、文部省からは徳島県から申請があれば、認可するという内諾を得、県は県立医専の設置に踏み切ったのである。そして昭和18年2月26日に徳島県立徳島医学専門学校新設の認可を得ることができた。

なお、市民病院の職員は昭和18年4月1日に全員県立医専附属病院の職員として任命された。その職種および人員は医師20名（うち5名は応召中）・薬剤師6名（うち1名は応召中）・産婆2名・事務職員5名・看護師20名・看護婦補10名・その他25名、計88名であった。

昭和13年に新蔵町で新築開院した市立市民病院は、昭和18年4月1日に県立徳島医学専門学校の附属病院となり、昭和20年4月1日に県立医専が国立医専に昇格したのに伴い、附属病院も当然のこと国立医専の附属病院となった。この医専設立が現在の徳島大学医学



部誕生の礎になったのであるが、その年の7月に徳島大空襲で新蔵町の附属病院はすべて消失してしまった。

5. 戦後の徳島市立診療所（北福島）

昭和20年7月の徳島大空襲によって徳島市の中心市街地のほとんどが焼けて壊滅状態となり、一時的に都市の機能を失ってしまった（図6）。医療施設もそのほとんどが被災し、診療できる状態ではなかった。徳島大空襲は被災者が約7万人で、死者約1,000人、負傷者約2,000人と推定されている。



図6. 戦災後の徳島市街地

戦災による混乱があり、焼け跡の片付けも十分にできていない8月15日には、敗戦という衝撃が重なったのである。そんな中から復興の胎動が始まり、医療施設の復興について徳島市は市立の医療施設の再開を急ぐことになる。早速、徳島市は独自で診療所の開設を計画し、「10月12日徳島県知事宛開設許可申請書を提出、10月22日認可あり、10月23日開所診療を開始せり」と徳島市事務報告書に記載されている。

当時、この診療所の開設と同時に勤務された多田節子医師は「徳島市医師会史（平成6年刊）」の中で、当時を回想して「市立診療所は北福島の伝染病院の西側にある焼け残っ

た木造の建物であった。昭和20年の秋ごろのことであった。橋本所長と私と2人で診療を始めていたが、そのうちに片岡義雄先生が復員されて外科・耳鼻科を診療し、私は内科・小児科を担当した」と語っている。図7は昭和初期の伝染病院の写真である。多田医師によれば、この西側に診療所があったようであるが、その写真は残念ながら残っていない。



図7. 昭和初期の市立伝染病院

徳島市立診療所は北福島町2丁目（現福島1丁目）の元市立救護所であった建物を利用して開設され、後に永谷 鼎先生が復員されて所長となった。この市立診療所は戦災直後という特殊な条件の中で開設されたため、設置場所が市域全体から見て東に片寄り、交通も不便だとの意見が市民から寄せられていた。敷地についても拡張できる余地がなく、病棟の増設は困難であるため、市としては徳島駅に近い市の中心部で本格的な総合病院を建設できるように強く望んでいた。

6. 徳島市民病院（寺島本町西）

昭和21年から22年にかけて、徳島市は北福島町の市立診療所を徳島国民学校の跡地（現寺島本町西2丁目）に移転することを決め、建設資材として板東兵舎の分譲を受け、入手した資材で診療施設や病棟を建設していった。昭和23年5月1日に市立診療所は北福島



町から寺島本町に移転し、総合病院を目指して施設の整備と内容の充実を図っていく。昭和24年8月1日の徳島新聞の記事は次のように報じている。「敷地700坪(2,310平方メートル)、延べ建坪400坪(1,320平方メートル)、ベッド数50床、診療科目は内科、外科、小児科、耳鼻咽喉科、産婦人科、放射線科、眼科を予定。院長は現診療所長の永谷 鼎氏が内定している。工費は1,200万円を投じて10月はじめに完成する」と。

木造2階建ての新しい病院は9月はじめに完成し、同月22日に市立診療所を徳島市民病院と改称した(図8)。その開院式は昭和25年6月13日午前10時から当病院で行われ、同日午後、市議会議場において大阪大学黒津医学部長による学術記念講演会が開かれている。



図8. 徳島市民病院(寺島本町西)

寺島本町西において開院した市民病院は場所的に便利なところに設置できたが、市有地が狭隘であったため、その後の増築などが思うに任せず、苦勞する。その中で設備の近代化と施設の拡充を図り、病床数については、昭和24年の市民病院として診療を始めた時点が50床、同25年59床、同26年75床、同29年130床、同31年に175床、同38年は196床にまで増床している。

2007年(平成19年)2月28日付の徳島新聞夕刊の記事に「一枚の写真ものがたり 徳島市民病院(1958年)」が出ている(図9)。この写真を見ると、1958年(昭和33年)当時の寺島本町西の市民病院の建物と戦後復興期の街の様子が懐かしく思い出される。記事の内容は、昭和3年2月に始まる市立実費診療所から中洲病院、新蔵町の市民病院、県立医学専門学校附属病院に至る市民病院変遷の歴史と、戦後の復興期のなかで地域医療に貢献した寺島本町西の市民病院が簡潔に紹介されている。

昭和36年頃のことであるが、私が高校生の時、この寺島本町西の市民病院に来たことがある。城南高校の文化祭で「がんの展示」をすることになり、生物部の先生から市民病院でがんの手術標本を借りてくるようにといわれたからである。当時外科部長を兼務していた副院長先生にお会いして、ホルマリン処理した胃がんや大腸がんの手術標本をお借りした。このとき余程緊張していたのか、副院長先生が言われたことを今でも鮮明に憶えている。何でも先生はつい最近大阪から吉野川河口に着く水上飛行機で徳島に赴任してきたとか、助任(スケトウ)という変な名前のところに住んでいるとか、子供さんが徳大の附属小学校に通っていることなどである。

当時は良く知らなかったが、この先生が胃がんの名医として有名な伊藤一二先生で、その後東京築地に新設された国立がんセンター中央病院の外科部長となり、後年都立駒込病院の院長をされた。私が外科医となり学会などでお会いすると、いつも「君、徳島だったね。僕は徳島市民病院にいたんだよ」と関西人らしい気安さで、この寺島本町にあった市民病院の話をよくされたものである。(つづく)



月刊 (夕刊) 2007年(平成19年)2月28日 水曜日

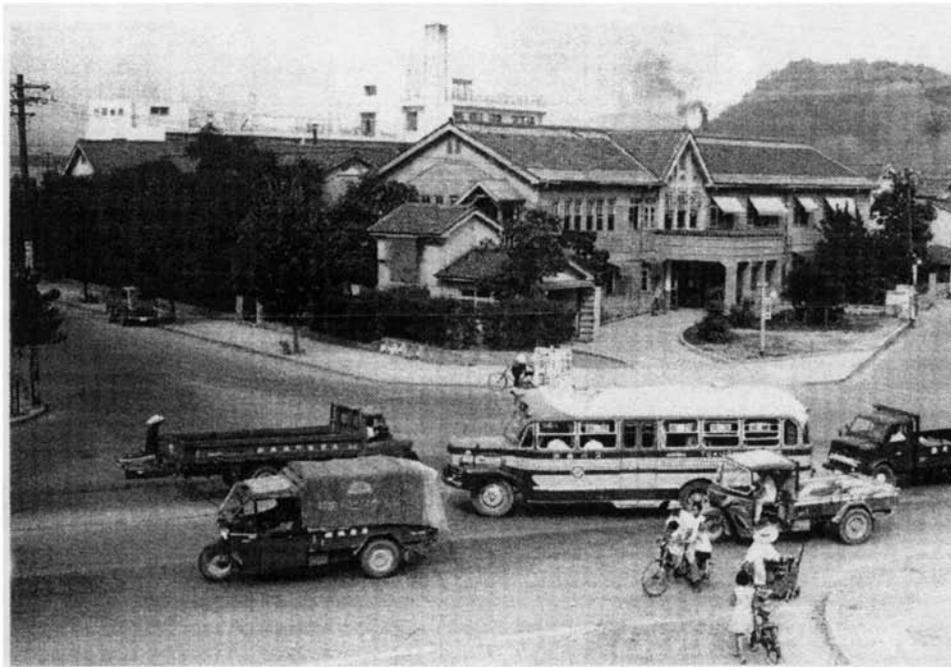
Meet&Talk



一枚の写真 ものがたり

徳島市民病院

(1958年)



道路を行くオート三輪にボンネットバスやスクーター。その手前には手押し車を押す人、自転車に三人乗りをした人の姿も写っている。なんとなくのんびりした感じに見えるのは、道路に信号もなく、写っている車両以外に自動車が見られないからだろう。写真は一九五八(昭和三十三年)に徳島市寺島本町西で撮影されたもの。当時の道路交通事情がよく分かると同

復興期の医療に貢献

市民病院の歴史は古く、その前身は一九二八(昭和三年)二月に徳島町にあった市役所に隣接して開設された「市立実費診療所」である。二年後、幸町にあった私立病院を買収して移転、「中洲病院」と改称したが、患者数の増加とともに手狭となり三十九年五月、新蔵町に新築移転して「市民病院」の名称で呼ばれるようになった。新蔵町の市民病院は四三年、県立医学専門学校付属病院になるが四五年七月の空襲で焼失した。同時に市内の多くの病院が焼け、仮診療所を設置するなどで急場をしのいだものの、病院を要望する声は強くなる一方だった。そこで五〇年六月に完成したが、写真にある徳島市民病院だった。病院用地には元徳島国民学校の跡地が利用された。戦後の復興期から高度成長期まで市民医療に貢献した同病院は、さらに医療施設を強化するために六六年、現在地に新築移転した。

(文・吉本旭写真部副部長)

市民の医療拠点として戦後復興期から高度成長期前半にかけて寺島本町西にあった徳島市民病院1958年、本社所蔵写真

図9. 徳島新聞(夕刊)2007年2月28日